—学会記 I—

第 29 回日本内分泌学会甲状腺分科会を終えて

的 場 直 矢

今年は当院では学会の当り年で5月17日には小生が第29回日本内分泌学会甲状腺分科会を、6月7日には菊池放射線科部長が日本医学放射線学会と日本核医学会北日本地方会を、そして11月6～8日に塩沢麻酔科部長がハイライトとして日本臨床麻酔学会を仙台で主催した。

甲状腺分科会は昭和33年甲状腺同好会として発足し、昭和55年以降は日本内分泌学甲状腺分科会と改まり、日本の甲状腺学の推進役としての役目をはたしてきた、戦後の日本で、甲状腺のホルモン合成にかかわり深い天然のヨードと全く同じ合成、分泌、代謝の経路を辿る放射性ヨードがトレーサーとして甲状腺研究に導入され、甲状腺は内分泌研究の先端を歩むようになった。この機運により、文部省の研究班が結成され、これが同好会のきっかけになったように記憶している。第一回の同好会は京都大学の三宅儀先生が世話人で開かれ、第二回から毎年主題が決められ、最初の主題の一つが甲状腺炎で、わたくしたちも亜急性甲状腺炎について出題し、会長の教室からの主題に少々生意気な質問をして、七条教授の大きな眼でぎょろりとにらまれた思い出がある。今回の分科会で七条先生から懇切な手紙を頂き今昔の感に堪えなかった。これ以来毎年主題が決められ、これを振りかえてみると、この30年間の日本の甲状腺研究の歩みが大凡把握出来るようである(表)。

今回私が甲状腺分科会長に指名されたのは、東北大病理の笹野先生が第59回日本内分泌学会総会を仙台で主催される事になったお蔭である。内分泌学会は発足して60年になろうとしているが、不思議な事にまだ一回も白河の間を越えて東北地方に來た事がない。甲状腺分科会の規定では、日本内分泌総会の開催される地元の専門家が主催する事になっている。笹野教授が仙台で内分泌学会を開くからには、仙台またはその近辺のしかるべ

き人がやるだろうと思ひ、その時は応分の協力をしなければと思っていた。しかし2月に何か風向きが変り、次回はお前に頼むと云う意向が伝わってきた時には、内心ぎくりとしたし、またその任ではないと思った。しかし6月の総会で決定し指名されたので、これまで同好会以来大いに啓蒙を受けてきた御礼で、仕方がないとあきらめ、それから一年間は全力投球する事に覚悟した。

主題の決定は評議員からのアンケートを元にして1つは現在問題になり、また複雑化の様想を示しつつある、「甲状腺のTSH受容体とその抗体を巡る諸問題」とした。もう一つの主題は、外科医である会長の希望として「甲状腺疾患における穿刺吸引細胞診ABCの意義と限界」を取り挙げた。現在外科的で最も問題である甲状腺腫瘍の良性・悪性の鑑別には、従来各種の検査が行われてきたが、現時点では原始的な触診と細胞診が一番Costのかかわらない、設備のいらない診断法と考えられ、内科の先生方にもこの事をよく知って欲しいと思った訳である。ただ心苦しかったのは、多数の応募があり、演題の約半分を削らなければならなかった事である。演題の選択に当っては、特に選考委員会は作らなかったが、とうてい私の一人の才の及ぶ所ではなかった。幸いにして外科医局には甲状腺に造詣のある谷村君、高屋君がいたし、また特に東北大学第二内科の斎藤慎太郎、桜田俊郎両講師と盛岡の栗原英夫先生に相談にのって頂いた事を有難く思っている。また両方の主題をミニシンポジウムのような形にしたが、内科、外科の立場ばかりでなく、基礎医学の立場から独協医科大学病理の山田 喬教授、検査技師の立場から埼玉中央病院の是松元子さんにとくをお願いして参加して頂いた。また折よく群馬大学内分泌研究所の鈴木光雄教授の所へ学術振興会の招きで来日されていた、ベルギーのブラッセル自由大学の人間

科学学際研究所長のジャック・デュマン教授に“functional roles of cyclic nucleotides in the thyroid gland”と題して特別講演をお願いした。内容は大変難かしいものであったが、人柄は大変フランクな方で、パーティーの席で自由大学の自由とは何を意味するのかと質問したら、宗教の束縛からの自由であるとの事であった。

学会の準備には一年間かかり、色々な事もあったが、5月17日当日は、快晴でもあり、また会場も市民会館地下小ホールと云う身内の仙台市のものもあり、実際の運営には万端とどこおりになく、あっと云うあいだに終わった感がある。終ってから色々の方からお誉めの言葉を頂戴したりしたが、これも学会の準備から当日の運営、後始末に亘って、一丸となって協力してもらった平部長を始め

とする外科全員、一々お名前は挙げないが当日協力して呉れた病院の有志の人々のお蔭であり心から感謝する。また陰に陽に御指導と御教力を頂いた東北大病理の笹野教授、後藤邦彦先生、第二内科の斎藤先生、桜田先生、第二外科の葛西教授、田口助教授以下医局の先生方に御礼申し上げる。この学会には医局にいた頃の協同研究者の先輩、同僚、後輩や、この学会のある事を聞いて思いがけない方々から御声援を頂いた事は大変強かった。さらに秘書として細心の協力をして頂いた大坂充子さんがいなかったら、この学会はとても出来なかったと思う。病院には一年間色々御迷惑をかけたことを深謝する。

表 甲状腺分科会主題一覧表

	主 題	会 長
第 1 回	昭 33 なし	三 宅 儀 (京 大)
第 2 回	昭 34 ^{131}I 療法に関する検討, 甲状腺炎について	七 條 小次郎 (群 馬 大)
第 3 回	昭 35 血中尿中 TSH 測定法の検討, 甲状腺ホルモンのペーパークロマトグラフィー法の検討	小 田 俊 郎 (大 阪 市 立 大)
第 4 回	昭 36 ^{131}I 摂取率測定法及び甲状腺シンチグラムの検討, サイロキシン類似物質の臨床応用検討	赤 須 文 男 (金 大)
第 5 回	昭 37 結節性甲状腺腫の治療方針, 甲状腺機能の中樞性支配, 甲状腺自家免疫	辻 昇 三 (神 大)
第 6 回	昭 38 甲状腺疾患の病理組織学, パセドウ病に対するヨード剤奏効の機序	吉 田 常 雄 (阪 大)
第 7 回	昭 39 悪性甲状腺腫の治療方針, 甲状腺機能亢進症の抗甲状腺剤による治療の遠隔成績	丸 田 公 雄 (信 大)
第 8 回	昭 40 甲状腺と酵素, ^{131}I -トリヨードサイロニン, レジンスポンジ摂取率の検討	勝 木 司馬之助 (九 大)
第 9 回	昭 41 LATS, EPS について, 甲状腺癌の予後	中 尾 喜 久 (東 大)
第 10 回	昭 42 各地各集団における甲状腺腫の発生頻度, 甲状腺機能検査に及ぼすヨードの影響	山 田 弘 三 (名 大)
第 11 回	昭 43 サイロキシン結合蛋白に関して, 甲状腺の電顕像, 甲状腺の組織学	吉 田 秀 雄 (京 府 大)
第 12 回	昭 44 甲状腺ホルモンの生成に対するヨードの影響, 血中甲状腺ホルモンの測定法	七 條 小次郎 (群 大)
第 13 回	昭 45 T_3 の生理的及び病態生理的意義, パセドウ病の治療	西 川 光 夫 (阪 大)
第 14 回	昭 46 LATS その後の進歩, 甲状腺疾患と妊娠	鎮 目 和 夫 (虎の門病院)
第 15 回	昭 47 TRF, 甲状腺に関する先天性異常	鎮 目 和 夫 (虎の門病院)

第16回	昭8	ラヂオイノアッセイによる TSH の測定, 甲状腺疾患と糖代謝異常	鳥塚 莞爾 (京大)
第17回	昭49	トリヨードサイロニン, 慢性甲状腺炎	入江 實 (東邦大)
第18回	昭50	バセドウ病と免疫, バセドウ病と他の内分泌疾患の合併症について	越智 幸男 (京府大)
第19回	昭51	バセドウクリーゼその病態と対策, 悪性眼球突出症	飯野 史郎 (昭和 大)
第20回	昭52	甲状腺刺激物質, バセドウ治療の遠隔成績	野口 秋人 (野口病院)
第21回	昭53	Hashitoxicosis, Revers T ₃	伊藤 国彦 (伊藤病院)
第22回	昭54	妊娠とバセドウ病, TRH 試験と T ₃ 抑制試験のバセドウ病の治療判定における意義	隈 寛二 (隅病院)
第23回	昭55	甲状腺ホルモン代謝, バセドウ病における異常甲状腺刺激物質, 甲状腺癌の診断法	鎮目 和夫 (東女医大)
第24回	昭56	甲状腺 invitro 検査の進歩—TBG 及び FreeT ₄ , 甲状腺癌の治療	鳥塚 莞爾 (京大)
第25回	昭57	Thyrogobulin の基礎と臨床, 甲状腺疾患の外科的治療の進歩と反省	藤本 吉秀 (東女医大)
第26回	昭58	甲状腺刺激物質とその関連因子	宮井 潔 (阪大)
第27回	昭59	甲状腺ホルモン代謝とフィードバック機構, 胎児・新生児における甲状腺機能及びその異常	中島 博徳 (千葉大)
第28回	昭60	甲状腺ホルモンの作用, バセドウ病の治療	松井 信夫 (名大)
第29回	昭61	TSH 受容体とその抗体を巡る諸問題, 甲状腺疾患における穿刺吸引細胞診の意義と限界	的場 直矢 (仙台市立病院)